

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-3

真紀は横田の浪費癖にまつわるいくつかのトラブルについて思い返していた。

「彼の才能を高く評価していたあなたなら分かって頂けるのではないかと思います」

朝倉は青臭いことを言うと、口角を少し広げて微笑もうとしたが、実際には自嘲気味に強張った表情になっていた。

「何ですか？今さら……。朝倉さんらしくないわ」と真紀は不快感をあらわにした。

「裸婦像は、お手元にあるのですか？」

朝倉は真紀の反応を無視して訊ねた。

「裸婦像？」と真紀は顔を歪めて反復した。

「あなたを描いた百二十号のあれです」

朝倉は真紀の口もとを、細めた目でなぞるようにしてデジタルな声で言った。

午後の陽光がたゆたう四十一階の広やかなパブリックスペースの一角に、茶葉が開く加減の時間が刻まれる中で、BGMはブラームスのヴァイオリンソナタ第一番【雨の歌】が流れていた。

真紀はホテルのサービススタッフの応対する低い声や、他のお客が使うデザートフォークの微音までも聞き分けることができた。

「話の持っていく方が下手で、大変申し訳ない」と朝倉は弱り果てた顔で弁解をした。

ヴァイオリンソナタは抒情と哀愁が入り交じる第二楽章へと移っていた。

「さっき、横田さんも同意なさっていると言われましたが、裸婦像をどうするおつもりですか？」

真紀は画家の名前を口にする事に違和感を覚えながらも、そこには数々の不条理を乗り切ってきた一流クラブのママとしての自負心がうかがえた。

朝倉は所望の絵画を競り合っている時と同じようなアドレナリンの分泌を体感して、喉に渴きを覚えていた。

「横田を呼びましょうか？今、下のギャラリーにいます」と朝倉は口を滑らせた。

BGMはピアノが奏する民謡風のメロディーにヴァイオリンが寄りそってペーソスを漂わせていた。「この人にもブラームスは聴こえているのかしら」と真紀は朝倉の心を汲むほど冷静になっていた。

「プライドのかたまりのようなあの人が、今さら私に……。ですか？」

「あなたが彼の傍にいてくれたら、こうはならなかったと思います」

まるでブラームスに不協和音を生じさせるかのように、朝倉は唐突に言った。